

## OMMJAPAN イベントディレクターレポート

まずはじめにUKでは1968年から今年まで46年間もの長きにわたって毎年開催されているTHE OMM。そしてマウンテンマラソンというスポーツをこの日本ではじめて開催出来たことを嬉しく思います。

またそれと同時に今後もこのOMMというスポーツイベントとそのマインド（スピリッツ）を、この日本に根づかせていくことが、日本においての山とその周囲の自然をフィールドに楽しむ人たち自身のリスクマネジメントの向上、そして日本のアウトドア業界の発展、さらには環境の保全に対しても確かな貢献になっていくと確信します。

またこのOMMJAPANが毎年開催されるごとに、ランナー、オリエンティア、アドベンチャーレーサー、ハイカーなど様々なアイデンティティを持った参加者同士の垣根のない交流の場ともなり、そこからまた新たなコミュニティが生まれていくことを期待します。

### 評価・課題・反省

今回、日本ではじめてこのOMMを開催するにあたっては非常に難しい課題がいくつもありました。まずひとつはこれまで日本ではマウンテンマラソンというスポーツが1度も行われて来なかったこと。当然のことですが今回OMMJAPANに参加したチームの殆どが、このOMMのOWNRiscの精神や、レースの厳しさ、また一切のサポートの無いレースに対してどのようなマインドで臨むべきか等の事前の心の準備がUKのチームのようにできていない中での初開催となる、という現実を覚悟しなければなりません。

ですが結果はストレートカテゴリーの完走率が36%という非常に厳しくタフな内容だったにも関わらず、参加したすべての選手が大きな事故や怪我もなく、無事にFINISHまで戻って来ることができました。これは事前にレースのコンセプトやルールについて、全国のショップや団体の協力を得ながら地道に行った説明会などの啓蒙活動、また当日のスタッフ・ボランティアの大きな働きもさることながら、何よりも日本の選手達の精神力が強靱であったということに他ならないと思います。この結果を非常に嬉しく思うとともに、来年以降のOMMJAPANの開催の大きな励みとしたいと思います。

またもう一つの大きな課題は、やはり開催地の確保、そして日本特有の山域の使用許可申請の難しさです。今回も大きな反省点として「一部走行禁止区間」を設定することを余儀なくされたことがあります。また、レース途中でCP10（スコアCP50）周辺の立ち入りを規制しなければならぬという重大な問題も発生しました。この件については参加選手達には多大なご迷惑をかけることとなってしまったことをこの場を借りてお詫びいたします。事前に町を通して地元の下承は得られていたものの、我々運営側もまじえて事前に細かいところまで地元住民に説明、ケアをしていれば回避できた問題だと思います。来年以降の重要課題として反省と改善に尽くしたいと思います。

※CP10の問題については別紙「CP10経過報告」でより詳細な経緯経過をまとめました。

またその他、今回のレースで得られた課題と、来年のレースまでに再考すべき代表的なポイントを以下にあげます。

#### Course

- ・トレイル、ダート、ロードの割合
- ・ナビゲーションのレベル（ストレート）
- ・ルートチョイスのない引き返しルートの有無
- ・スコアのスタート方式
- ・DAY1 FINISHとキャンプ地の位置関係

#### HQ（ヘッドクォーター・受付）

- ・より良いインフラ環境
- ・受付とHQの位置関係

#### 競技ルール

- ・禁止行為に対する事前の周知徹底

以上はほんの一部に過ぎませんが、これらをしっかりと精査し、英国THE OMMが掲げる「参加者の為にある」というレース運営のマインドを我々OMMJAPANも継承しながら、よりチャレンジングで魅力の溢れるイベントになるよう努めていきたいと思っております。

## THANK YOU FOR ALL

この第一回OMMJAPANを、ともに作り上げてくれた、我部乱氏、田島利佳氏、小泉成行氏、細谷かこ氏、大場氏、大木ハカセ氏に。

また選手と同じく厳しい悪天候の中、レースを支えてくれたすべてのボランティアの皆さまに。この競技エリアを提供してくれたばかりでなく大会運営における様々な部分で手厚いサポートを頂いた東伊豆町と職員の皆様に。

そして、この第一回 OMMJAPANにチャレンジしてくれたすべての選手皆様に。

最後に、当初よりこのOMMJAPANの成功を願い、この運営チーム結成にも尽力してくれたトレイルランナー相馬剛氏に。

心から感謝を贈りたいと思っております。

本当にありがとうございました。

OMMJAPAN イベントディレクター 小峯秀行